矢作川流域圏懇談会「第６回海部会ＷＧ」会議開催報告

1. 実施概要

(1)実施概要

〇実施日時：平成 24 年 11 月 5 日(月)
14:00～17:00

〇開催場所：西尾市役所５階
（５３Ａ・Ｂ・Ｃ会議室）

〇参加者：16 名（事務局含む）

(2)内容

【プログラム】

１．開　会　青木座長挨拶
２．「第３回 海地域部会」の振り返り
３．本日の会議目的について
４．４つの課題の検討経緯と現時点での取り組み状況、意見・提案等について
５．その他の課題についての具体的な取扱いについて
６．その他
７．閉　会

2. 主な会議内容

第６回 地域部会ＷＧで話し合われた主な内容は、以下のとおり。

（１）ごみ、流木について

- ごみ流木の調査については、過去の状況を良く分かっている**西尾市に県管理区間を含めいくつか候補地をピックアップしてもらう**こととする。
- 今後、**大出水時に候補地のゴミの状況を確認しに行く人を決める**必要もある。港湾については管理者や漁協にお願いして情報を頂くようにし、ゴミや流木などが集まったときにすぐに少人数での調査団が調査へ向かえるように準備する。
- 調査の方法は、県にも過去の調査実績から提案をもらいブラッシュアップしていく。

（２）生き物調査について

- 生き物調査（観察会）を通じた海の健康指標の作成については、同じ場所での**継続的な調査結果の比較による評価が必要**と意見であった。**水産試験場の調査データ等の活用を含めて、学識者、試験場と次年度に向けどんな方法があるかを調整する。**
- また、伊勢三河湾ネットワークで実施した健康診断の報告書についても情報提供して頂き参考とする。

（３）海と人の絆再生（アクセス改善）について

- 観察会は、様々実施されているが**学校の行事となると教育委員会が関係するため難しくなる**。年３回実施している豊田市の山の子ども達を連れてくる**森と水の助成事業では、学校行事ではなく学校には募集の手伝いだけ**をしてもらっていることが分かった。
- 流域圏懇談会としては、観察会を主催するのではなく**観察会等の市民活動が円滑に運営できるように活動の仲介を行う方向で検討を進めていく**こととし、特に干潟で遊び学ぶ活動を仕掛ける**仕掛け人をどのような方法で増やしていけるかを次年度以降の課題**とし、今後、検討していく。

（４）干潟再生

- 全体の課題の取り組み方針の確認を含め、次回 12 月のＷＧで話し合う。

■ **意見交換**（・　ご意見、提案　　➢　回答）

（１）ゴミ、流木の課題について

・　答志島 奈佐の浜プロジェクトは、「100 年後のゴミゼロ」を目標としているが、これを達成するためには伊勢三河湾全体でゴミをゼロにする必要がある。ゴミ・流木関係の活動が目指すものは、矢作川流域圏から奈佐の浜を清掃しに行きましょうという内容ではなく奈佐の浜を御旗にしつつ、矢作川流域圏は先行して流域圏での調査等を実施し、情報を発信することで伊勢三河全体のゴミを減らせるのではないかという趣旨である。（事務局）

・　愛知県の協議会の実情としては、環境部は法律ができて地域計画を作成し対策を進めなければならないと考えているが、グリーンニューディール基金の打ち切りもあり資金面の課題やゴミ問題に消極的な管理者など行政の部局間の連携が必ずしも円滑ではないという課題がある。むしろ、ここでやっている活動の市民の熱意で行政を動かしていくことも重要なファクターである。（青木）

・　今後も海岸漂着ゴミの対策を継続していきたい思いであるが、河川部局から海のゴミを全て川のせいにするなという意見も確かにある。昨年度でニューディール基金が終了し、本年度から予算はほぼないため会議以外のことはできていない状況である。今は国への予算要求を優先している。（原野）
  - ➢　環境省が、財務省に概算要求している内容も離島しか対象としていない。（青木）
  - ➢　人が住んでいないとだめ。佐久島は大丈夫。（石川）
・　予算はつきそうか？そもそも補助金は必要があるのか？（事務局）
  - ➢　現時点では、法律にそった内容の対策を進める上で必要な事業費を環境省へ要求するというスタンス。（原野）

・　ゴミも２点ある。川から流れてくる一般ゴミ、台風等の災害時の流木ゴミ。漁業者は後者が非常に困る。２種類あることを知ってもらう必要がある。漁協では一般ゴミの清掃を実施しているが、流木ゴミは集めた後、事後処理等を市に相談している状況である。（石川）
  - ➢　海岸放置のゴミが潮位によって集まる特徴もある。製材や河畔林もある。大半のごみは川から発生しているものが多く責任を否定できないと思う。（事務局）

・　海にゴミをわざわざ捨てにくる人がいる。今は禁止されているが、昔は川をきれいにしよう農家による土手清掃で集めたものが全て川に流されていた。（石川）
・　落葉ゴミは、いつの時期が多いか？（長谷）
  - ➢　葉やヨシなどは、分解すれば問題ないのではないか。（高橋）
  - ➢　栄養塩類との関係もある。流木については、やはり土砂くずれの発生するような夏から秋の台風時期が多いと考えられる。山の健全が海へ影響する問題でもあり調査を行う意味がある。（事務局）

- 県でのこれからの調査の予定はどうか。（事務局）
  - 田原など。矢作川は昨年実施した。（青木）

- ゴミがあると不都合なのは、一番は漁業者。もう１つは、答志島 奈佐の浜も関係する景観面での問題の大きく２つと考えられる。対策協議会の方では、どのような不都合な問題があると整理されているか？（石田）
  - 環境省が定めた法律「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な景観及び環境の保全に係る海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律」（海岸漂着物処理推進法）は、外国から流れてくる日本海側の漂着ゴミが法律策定の背景にある。（原野）
- 法が想定しているのは、景観を損なう自然分解しない浮遊系のゴミとなるか。（石田）
  - どちらかというとそうしたゴミを対象としており、災害時の流木ゴミは対象としていない。（原野）

- 船舶航行や漁業上の支障をきたす流木ゴミは発生すると被害を受ける方から声が大きくなり、これまでは漁業者自らの処理を進めるが処理しきれない部分については、一色町や蒲郡市などの自治体が資金を出し、処理するという流れが実態としてあったと想像される。対策協議会は、その点では関連しないということか。（石田）
  - 手を挙げたところを重点区域として定めている。実態は、自治体も毎年の海岸清掃の予算が厳しいため海水浴場を設定していることが多い。法律理念や目標と実態の乖離はあるが、予算のない中で、なるべくお金をかけずに県自らも取り組もうとしている。（青木）

- 漁業系ゴミの発泡スチロールが答志島でも目立った。マリンブルー21（油濁防止機構）は、発泡スチロールの油化のイベントを実施している。今後、奈佐の浜でも古い機械を入手してやってみたいという話もあり話をしてみようと思っている。（井上）
- 行政活動でない通常の NPO 等のゴミ清掃等の活動へ流域圏懇談会として着目すべきところではないか。渥美の西の浜や三谷水産高校の部活など活動を調べ、連携できることを探っていくのが良いのでは。（石田）

- 流域圏には、モデル山林のようなものはあるのか？（長谷）
  - 20 年前にモデル林に指定された場所が、その後の手入れがなくてモデルと呼べない山林の状況が問題となっている。（井上）

- 庄内川では、藤前干潟で毎年実施する清掃で膨大な量のゴミが集まり、参加者の継続へのモチベーション維持に課題がある。そのため、ゴミの減量化への期待が大きく矢作川流域圏でやろうとしていることに関心を持たれている。また、長良川環境レンジャーは、岐阜市内で活動し、ヨシなどの自然ゴミはとらない。桑名では漁民がヨシも集める。集め方も違うことに気づいた交流連携の例がある。ここでは八幡を含めた３か所でも交流が始まっている。減量化に向けた調査であれば、試験的にも連携したいとの希望を聞いている。（事

務局）

- また、国では河川管理者の取り組みとして全河川ゴミマップを作成し、ゴミ抑制に向けた啓発を実施している。（事務局）

- 将来的には、こうした活動の中から家電やペットボトルのデポジット制の導入など政策課題として国や議員へぶつけていく目標が必要と思う。（井上）
- デポジット化に関しては、県の条例化での対応はできないのか？（事務局）
  - 県内だけの話でないため難しい。経産省に家電関係の車のリサイクル料金のような施策の陳情を毎年やっているが、家電でも上乗せも実現していないため、より安いペットボトルでは難しいと考える。（原野）

- ビニール袋の有料化は国内でもやっと進んだ。ドイツは厚手で規格品のペットボトルでリサイクルが進んでいる。（高橋）
  - 過去には、生協など個別で対応を考えて経緯もあったようであるが、法的な規制をかけないとメーカー等単独ではできないこともある。（松井）

- どこの漁協でも年に何回も海岸清掃をやっている。海岸清掃をしているとペットボトルは少ない。漂着ゴミは拾えるからまだ良い。沖へ出てマンガを引っ張るとビニール袋ゴミが多い。海底のビニールゴミは、海底の生き物が酸欠になる問題もあり漁民が出て拾わざるを得ない。今の漁民は飲み物ゴミを必ず持ち帰る。まだ、釣り客のマナーが悪い。（鈴木）
- 海底にあったゴミはどうするのか？（事務局）
  - 操業の時間は決まっており、人力で作業する時間はない。稚貝サイズの小さいゴミはそのまま落ちてしまうが機械的に自動でゴミが振り分けられるようになっている。肥料袋やビニールの買い物袋、弁当ガラなどが多い。（鈴木）

- 調査計画（案）は、具体的に平成 25 年度から調査を進めることを考えてのものか。（石田）
  - 調査を川、海など関係者が連携してやっていこう、そのための議論のたたき台として作成したものである。大出水が起きたときにやることを想定しているので、来年中に調査するかどうかはわからない。大出水時には、関連する自治体や海岸管理者等と一斉に調査を実施し、実態を把握したい。（事務局）
- 伊勢三河湾のゴミが相互に関係する話なので減量化に向かうまでには、膨大な調査にならないか？（石田）
  - 減量化へ向けた対策へすぐにはつながらないかもしれないが、調査から実態を知ることから始める必要があるとの認識である。（事務局）
- 10 月 18 日に３県１市の会議があった。行政と市民団体が協働してやっていこうとする方向性はあっている。来年は、郡上と答志島、再来年は西の浜と答志島ということになっている。今年は愛知からの補助金は出なかったが、県内で実施する際には補助がでるのではないかと期待している。（井上）

- 調査は、河川については河川管理者でできるので、海辺について調査団としてどこへ入ったら良いかということを県や市と情報をもらい候補地を決めておく必要がある。（事務局）
  - 重点地区については、かなり綿密に調査をしているはずである。（青木）
- それらの調査結果については情報提供してもらい活用しつつ、少人数でも調査団を組み、状況を把握するために別のごみ集積箇所を調査するのが良いのではないか。（事務局）
  - 松尾橋から下流の矢作古川の河口が一番多い。大潮がくると小段にゴミが乗ってそのままになりやすい。県管理区間なので西三河建設にお願いしているが、そのままになりいずれ流れていくこともある。アシや流木が多い。（河原）
- 汚いところへはゴミを捨てやすい問題もある。護岸のない場所が一番多い。海から流れ着くのではなく川からきたゴミが溜まっている。（鈴木）
  - 矢作川の碧南側のアシハラにビニールゴミが多い。（石川）
- 現状を良く分かっている西尾市に県管理区間を含めいくつか候補地ピックアップしてもらい、大出水時にゴミの状況を確認しに行く人を決めておくこととしたい。港湾については管理者や漁協にお願いして情報を頂くようにしてゴミや流木などが集まったときにすぐに調査へ向かえるように準備したい。（事務局）

- 漁船に誰か乗せてもらってゴミ調査に行くことはできないのか。（事務局）
  - 最近、矢作川をきれいにする会が主催し、吉良で実施している。大矢さんが乗っている。持ち帰ったゴミを港で分別し、集計結果はまだ見ていない。（石川）
- 写真があれば提供してもらいたい。吉良支所へ確認してみる。（事務局）
  - 調査結果がなければ仕事へいくときに乗っていくという方法もある。（鈴木）
- 底引きとマンガで取れるゴミの種類は違う。（高橋）
- 候補地を定めつつ、各管理者等で調査に入れるところでは入っていく方向で検討を進めることとする。（事務局）

（２）生き物調査について

- 伊勢三河湾ネットワークでは、４年前に六条干潟と藤前干潟で海の健康診断をやっており報告書も作成しているので、それと比較するような簡単なやり方かと思う。（松井）
- 地域を狭めても、海の健康指標をつくるのは難しいか。（事務局）
  - 単純ではない。六条の結果が基準となり、一色干潟を評価するということはできない。東幡豆と一色も違う。評価するのであれば同じ場所で何年か経年的に集めたデータの比較になる。また、一色干潟の中でも色々な場所があり、場所によって生物相が違うのでそれらを組み合わせてどう評価するかという点でも単純でない。ある程度継続調査すると、ある種の貝や生き物数の増減や底質などの変化を評価ができ、干潟の基準もできてくるのでは。（石田）
- 市民の調査結果だけでなく、試験場で集めている底質や生き物のデータと平行して動かないとなかなか上手くいかないということか。（事務局）
  - 試験場にあるデータを基盤として有効に使うということは良い。（石田）
- 継続的に実施することは、流域圏ではなかなか難しいかもしれない。（事務局）

- ➢ 試みとしてはやるんだろうと思う。生き物観察は、干潟を維持するための健康診断的な調査と、子どもに海に親しませるという環境学習的な２つの大きな目的がある。（石田）

・ 生き物調査を通じて調査手法や基準のようなものが作れるかは、学識者の方、試験場の方と調整し、来年度に向けてどんな方法があるかをもう１度、叩いてみる。（事務局）

（３）海と人の絆再生（アクセス改善）について

・ 既に多く実施されている環境学習会等を流域圏でバックアップできることはないだろうか？できれば、駐車場やトイレ、スロープなどの環境整備をするだけでなく、漁業者の活動への市民の理解が深まり、漁業権と相反せずに地元にもお金が落ちやすい方法はどのように検討するか、三河湾をもっと児童に勉強して頂きたいので教育委員会との仲立ちをする などが事務局の思いとしてある。（事務局）

・ 西尾市は合併し、市民であっても海を知らない。東幡豆まで来てもらえば海まで 10 分以内であるし名鉄利用促進にもなると、町長にも市長にも言ってきたが、市長は、西尾の駅から西尾市内の学校までが遠いことが参加しにくい理由ではと回答があった（石川）。
・ 生き物観察は、少し試験所に手伝ってもらえれば、小学校の高学年であれば土の中の生物の観察は水で洗ってその中にどんな生物がいるかという簡単なことなのできると思う。見える範囲で班分けし場所を決めてやる方法ならどこでもできると思う（石川）

・ 東三河の生物同好会とかそういうようなものが自然観察会をやったような覚えがある。それらの結果を見れば、生き物は共通性も多少はあるかと思うのだが。（長谷）
  - ➢ 共通するものもある。（石川）

・ たくさんの方が観察会等をやっている。その中で流域圏として何をやるか。流域圏が主催して連れていくという訳にはいかないのでつなぎを担うようなことを考える必要がある。駅から学校まで遠いならバスを使えば良いと考えるが、参加人数によっては公共交通を使わざるを得ない場合もあり、移動手段をどう工夫するか等の運営上も課題もいろいろ出てくると思われる。（事務局）
  - ➢ 今、県の森と緑の助成を年 3 回以上の活動に対して助成を受けているが、その中に取り入れればやれないこともない。（石川）

・ 石川組合長のところでは、年間ものすごい計画をやられているが、年度当初から全てを計画し募集しているのか？要請されているものが多いのか？（事務局）
  - ➢ 募集は、森と緑の助成金の活動の３つ以外は、県環境部水地盤環境課が世話してくれるものを受けている。（石川）
・ 県に聞いても殆ど石川組合長のところだから、他の組合長の所になかなかいってないので、大丈夫かなと思った。（事務局）

- ➢ はっきり言って他の組合長は面倒くさいことは多分やらないと思う。教材も自分で浜へ行って自分で写真を撮ってパネルに貼って作成している。石田さんはご存じだと思うが浜にいる貝はまだまだもっと種類があり、ほんの一部だけだが自分で捕ってきて写真を撮って、それを教材として足りない物は試験所に行って何か無いのかと借りてきてやる。そうするとおしゃべりするのが半分で済む。今年の最後は教育長もお見えになったので良いことだと思う。（石川）

・ いいトンボロ干潟がある場所で、非常に良い活動をされている。県、市、市民団体は、行きやすい所で多分組合長の所にいかれていると思うが、流域圏としてのバックアップとして何ができるかをもう少し議論させて頂けるといい。今日はあまり時間がないので何か次のヒントを是非頂きたい。（事務局）

・ 市民が海を知らないということだが、盛んに環境教育をやっているのは割と市の海の近くの人か、それとも結構山の方なのか。（青木）
  - ➢ 近くの人も知らない。呼んでくるのは山の親子をバス代を出してもらって呼んできている。（石川）
・ 既に流域圏のことをやられている。（青木）
  - ➢ 山、川、海の関係のことを話している。（石川）
・ 山はどこを対象としているのか？（事務局）
  - ➢ 3 年が新城の方、去年が額田、どちらかと言えば豊田市でも山の方を選んでいる。チラシを作り学校で学校行事とは別に募集をしてもらう。
  - ➢ 学校の行事となると今度は教育委員会が入ってくるのでなかなか難しいので、学校の先生のご苦労になるが、これだけ位の人数を集めて下さいとお願いしている。東幡豆小学校は学校の行事としてやっているが、それ以外は学校にはお手伝いをしてもらう程度。（石川）

・ 西尾市内の小学校は、自分達で準備し来る調整をすれば受け入れるような形か。（事務局）
  - ➢ 今のところ話はないがあれば受け入れる。
  - ➢ ようやく学校の先生方が現場や浜を知らないといけないということで、12 月に来る。まず、先生方が知らないと子供にも何ともいえないという形で、先生方が勉強をする。（石川）
・ 学校の先生方に一度、体験して頂いて、学校に戻り先生方が行事として考えるというのは良い。（事務局）
・ 貝類などの標本を見せ、勉強したりするのも良い。（長谷）

・ 例えば碧南だと水族館と一緒になって観察会をやっている。西尾は、ふれあいの里が主催で鳥を見る会とかやっているが、海を見る会はない。（高橋）
  - ➢ 今までは海がなかったということではない。西尾にもちょっとはあったが干潟ではないだけ。（石川）

- 三河港湾では、生涯学習課と毎年夏休みの最後の日に干潟観察をやっている。今年は９月１日に東幡豆で今年は西尾市が合併したというのがあって市全体に募集かけてやった。集まったのが年 3 回のやつで 60 人位。親子で参加して頂いて、干潟観察、そして前島まで渡って前島の観察などをやった。（松永）
  - 干潟観察と島の観察と地引網と 3 回やった。今までは幡豆町にあったわくわく体験塾を合併したもので西尾まで広げてやった。（石川）
- 三河港湾では１回手伝わせてもらった。船を出させて頂いて、海側から見た地元の町はどうなのか。あと、観察会の補助員としての手伝いもやった。（松永）
  - 陸から自分の所を見ることはできないので、海上から地域を見て島から自分の家や学校がどこにあるということを生徒に質問しながらやっている。（石川）
- 地元の方でも親子３代での参加者は、親世代は久しぶりで子供は初めてという方が多かった。（松永）
  - やはり海と離れている。（事務局）
- 潮干狩りには子供は来られるけど、例えば矢作川に入っていろいろ捕るっていうのはほとんどいない。（高橋）
  - 潮干狩りの時はアサリ以外、他のものは全然目に入らない。観察会でまず言うことは今日は潮干狩りではないので他に目を向けて下さいということ。（石川）

- こういう活動をコーディネートしてくれるというような動きはないか？例えば、大学の先生が１つの使い方を示し、コーディネートするような教育界での実績はないか。（事務局）
  - ない。東幡豆小学校の食育の勉強で来ること程度は聞いたことがある。（石川）

- 蒲郡のように貝類を集めて、そういうものを展示して一般に見させるというような常に身近にある物を普及させる、そういうことも良いと思う。（長谷）
  - 私もそういうのは興味がある。シーグラス（割れた硝子が洗われてキレイになった物）や貝殻だとかを集めてシャンデリアにしたり、ホームページを見ると色々なことがやられている。趣味での領域は広く、環境教育と絡む話だけども、仕掛け人がいないとできない。三河の方で調べてもそれを仕掛ける人がいない。（事務局）
- そのような人材は聞かない。私も大矢さんの市民環境大学の「味わって知る」のイベントで初めて知った。（松井）
  - こうした海の資源を拾いに来る方も多くいる。生き物調査の関係は、調査方法等についてはもう少し詰めさせて頂くこととし、人をどのように海へ連れてくるかというアクセス改善の関係は、楽しみながら子供達が学習できる良い方法がないか等の方法論を検討することを課題とし、次年度に引き続き検討に入っていく形でどうか。（事務局）
- うまく合体させられれば良い。（青木）
  - 今後、どのように展開するか分からないが、4 課題の中での個別の話も出てきたので、引き続き検討する課題についても位置付けて、来年度具体的に議論をさせて頂く。やはり現地を見る必要もある。是非、トンボロ干潟に一度行くと良いと考える。（事務局）

（４）その他

今後のスケジュール等の確認について（事務局）

- 12 月 11 日の午後 1 時から 3 時まで、井上市民部会長の海の課題に対する発表、その後に試験所、最後に鈴木副座長の方より海の課題と対策という主旨で立場の違ういろいろ課題を出して頂く 2 時間の勉強会を西尾市文化会館で開催予定である。
- 勉強会は、個々の部会活動が忙しくなってきたので、どれだけ参加があるか分からないが、山や川にも声掛けしている。
- 勉強会に引き続き 3 時から海の最終ワーキングを 2 時間やり、ここで 4 点目課題と今日の振り返りとで課題全体の確認を行い、来年度以降、山、川に対して何を連携提案していくか全体会議に諮る内容を検討する。
- 行政担当者の異動の可能性もあるため、次年度のできれば 4、5、6 月位の活動予定と年間の活動予定位を決めておけたらうれしい。
- 12 月 11 日に WG を行った後は、市民会議で各部会の報告を議論し、結論は 1 月 22 日の地域部会、座長、副座長調整会議で各座長、副座長で部会の実態を話し、連携すること調整をし、全体会議の 2 月 18 日に報告することになる。
- 第 2 回全体会議は、前回と同じように関わっている方の主要メンバーは委員として出てもらった方がいいという形になると思われる。関係市長への参加の要請をしたいと思っている。
- まだ、国の各省庁との連携は上手くいっていないが、市、県とは一定にこういう場に来て一緒に話せるようになってきた。議論の場の形成には年数がいるので忙しい中大変であるが、引き続き最後のワーキングもお願いしたいということで閉めさせて頂く。

以上